

病院はパートナーである

岡部 禹 雄（山梨県／病院図書館研究グループ代表）

医療雑誌社の取材があった。取材をおえて帰りしな、当の婦人記者はこう洩らした。「病院はナニもしてないですネ」。同じ病院で、病棟の婦長さん、「病院図書館って、私たちにとって、ただそこに本があるだけって感じ」。この民間リハビリ病院に私たちの手で病院図書館が開設されて1年余がたったある時点でのことである。何よりも患者さんたちの確かな反応が、グループの活動を支えて来たのである。この間に提供された図書冊数は約3,000冊、投入されたボランティアは、のべ200人に近い。

「病院はナニもしてない」は、同時に、運動にかかわった私たちグループ自身の問題でもあろう。山梨県ボランティア協会が開いた医療・保健・福祉・ボランティア講座＝病院ボランティアは育つか＝に招かれた遠来のT講師、雑談の中で「外から病院の中へ入るって、むずかしいですヨ」が耳に残る。病院図書館運動にとって、病院とは――、けだし病院図書館以前の存在であると。こんな定式すら突きつけられたおもしろい、グループの活動記録である。

まだ耳慣れない語であるが、病院図書館は、正しくは病院患者図書館のこと、日本では60年代にはじまる。が多くはボランティア活動で、今も新聞等の話題以上には出てない。「病院図書館って知らなかった」医療人が、ごくごく普通なのである。私たちががかわる山梨の地域で、一つは前記の民間病院（120床）。それ以前に、グループは県立中央病院のその創設にかかわった。が現在は関係は中断されている。病院側の「民間団体との提携事業は公立病院にはなじまない」とするあきらかな拒否反応による。いま院内での活動は、県立高等看護学院の学生ボランティアを軸に、ひとり我が道を行く路線で維持されているが、状況はきびしい。基本は、「外部はなじまない」のままで

あるようだ。そしてもう一つは、先進的なある自治体立図書館が、町内巡回の一環に、3つのリハビリ病院に、玄関前巡回自動車図書館号を配置している活動である。ここは実施5年目にして、2つの病院は消えてしまっていた。開かれた図書館が、開かれなかった病院につき合った山梨の記録である。グループが主体者となつてすすめる活動は、冒頭に述べた側面をもちながら――、共同の営みには相当の距離はあるが……。以上3つの情況に共通しているのは、病院図書館に、当の病院自体が、受けとめられる視点を容易にもちあわせていないことである。

私の少ない見聞であるが、西の京都南病院（300床）と、東の国立東京病院（700床）の場合、自立した病院図書館として、それぞれにある典型を示しているように見受けられる。前者は病院が設置し、専門職を配置していること、後者は患者自治会の手で設立、運営されていることに特色をもつ。一定の規模をもち、新刊書の購入も支えられており（程度の差はあるが）、利用者層との密着が、深いところで交錯している点、両者とも図書サービス活動だけでない多面にわたる交渉がある点が注目される。京都南病院の場合は、より安定的な活動といえよう。

当面、私たちグループが展開をはかろうとしているのは、地域の中で、核となる公共図書館と提携でき、共同事業として病院図書館づくりをおすすめることである。病院は、活動のパートナーたる位置に立つことを期待する。これが実現したとき、これからの運動にとって重要な切り口となってゆくだらうと思う。病院患者図書館運動にとって、より公共性、普遍性の上に立ったベースとなるものは何か、私たちの模索がいまはじめられようとしている。